

函館ワンニャン物語 ⑬ ～老迷い犬～

◆平成二十三年三月六日夕刻

ラブとクロを連れ、湯の川に散歩に出た洋一は、異様な行動をとる犬を発見する。

犬は、波打ち際をくるくると回っている。

時々昆布の切れ端を口に入れては吐き出している。

急いでラブとクロを連れ家に戻る。

洋一「聖子、大変だ。海に様子のおかしい犬がいる。

いっしょに、来てくれ！」

聖子「おかしな犬って？」

洋一「よたよたしながら、ただくるくる回っているばかりなんだ。きっと、目が見えてないと思う。」

聖子「目が見えてないの。それは大変、わかったわ。

すぐに行くわ。」

洋一「急いでくれ！」

二人で走って、犬のいる浜辺に行く。

相変わらず、何かを口にしては吐き出し、その場をくるくる回っている犬を見つける。

洋一がすぐ近くまで行く。

洋一「やっぱり目が見えてない。」

聖子は黙っている。

洋一「どうやら、耳も聞こえていない。かなりの老犬のようだよ。」

二人でしばらく犬の様子を見ている。

聖子「保護するしかないわね。」

洋一は、返答をためらう。

今の状況でまた犬が増えることへの不安がそうさせていた。

しかし、洋一は意を決する。

洋一「そうするしかないよな。」

目も見えず、耳も聞こえず、歩くのもやっこのこの犬が、どうしてこんな海辺にいるのかわからなかった。

聖子「捨てられたのかしら。」

洋一「わからない。でも、首輪はしている。迷って来たとしたら、どこから？この犬、目が見えないのに・・・。」

二人は犬を保護し、自宅に戻る。

とにかく餌と水をやる。

犬はよほどおなかをすかしていたのか、むさぼるように餌を食べている。

その様子を見ながら、洋一も聖子もこの犬を飼う決意をする。

洋一「家で面倒見るしかないよな、この犬。」

聖子「そうね。ちょっと大変だけれどね。」

苦笑いをしながら、洋一が言う。

洋一「明日、保健所に連絡してみる。もしかしたら、飼い主が探しているかもしれないし・・・。」

聖子「そうね。そうして。お願い。」

◆館岡家（居間）

慌てて玄関を開け、洋一が居間に入ってくる。  
満面の笑みを浮かべて、

洋一「聖子、見つかった。この犬の飼い主、見つかったぞ。」

聖子「本当！よかった！」

洋一「保健所に電話を入れたら、犬がいなくなって、困っている人がいるって聞いたので、さっそく連絡をしてみたら、この犬に間違いない。首輪の色や特長、すべて一致する。やっぱり目も耳も聞こえないかなりの老犬だそうだ。」

聖子「どこの人？」

洋一「高盛町、函館バスセンターの近らしい。飼い主の方が、お年寄りらしいのでこちらで届けることにしてきた。すごく喜んでたよ。」

聖子「それは、よかったわ。」

洋一「さっそく、これから届けてくる。聖子も一緒に行くかい？」

聖子「そうね。一緒に行くわ、私も。」

二人で犬をゲージに入れ、高盛町に向かう。  
老犬の飼い主（おじいちゃん）は、外に出て待っている。

犬を見て、飼い主が駆け寄る。  
喜びを体いっぱい表し、老犬の頭を撫でている。  
その様子を見つめ、洋一と聖子の目に涙が浮かぶ。  
一人暮らしの老人が、大切に飼っていた犬である。

◆自家用車（帰宅途中）

洋一「これが喜びだよな。これが、生きがだよな。」

聖子「そうね。」

洋一「こういうことがあると、この活動を続けてきてよかった、本当によかったと思えるよな。」

聖子「そうよね。おじいちゃんもすごく喜んでいたし・  
・・・、それよりあの犬、本当に飼い主のもとに帰ることができてよかったわ。それがあの犬にとって一番の幸せよ。」

洋一「それにしても、高盛町から湯の川の海岸まで、目も耳も聞こえないあの犬が、車にも轢かれず、波にもさらわれず、よく湯の川の海岸まで辿り着いたって、奇跡だよな。それも、三日間もさ迷っただぞ。」

聖子「信じられないわね。」

洋一「とにかくよかった。本当によかった。」

聖子「せっかく、我が家の犬になるかなと思ったのに、ちよっぴり残念よ。でもあの犬にとっては、やっぱり飼い主が一番よね。」

洋一「家の犬や猫も、そう思ってるかな。」

聖子「そうに、決まっているでしょ。」

(「函館ワンニャン物語 ⑬」へ続く・・・)